

令和3年度 自己評価表（中間評価）

鳥取県立鳥取西高等学校

教育目標	藩校「尚徳館」の「文武併進」の精神を受け継ぎ、高い志を持ち、幅広い教養を身につけ、社会の進歩・発展に貢献する創造性豊かな人間を育成する。		
中長期目標	1 生徒が学問の意義に目覚め、深く学ぶことの喜びを実感できる質の高い教育を推進する。 2 生徒が確かな学力を身に付け、自己の将来像を描き、進路目標を実現できる教育を推進する。 3 生徒に良識を培い、自律と規範、自立と共生の精神を涵養することによって、社会のリーダーとなる素養を育てる。 4 教科の学習とともに、部活動や学校行事等の体験的活動への積極的参加を通じ、知徳体のバランスのとれた人間の育成を図る。	今年度の重点目標	『深い学び』『幅広い学び』を通じて新時代を創造するリーダーの育成を図る ① 学問の奥深さに触れ、深く学ぶことの喜びを実感できる授業を研究・実践する。 ② 「大学進学重点校」として、生徒が高い進路目標に挑戦し、その目標を実現する。 ③ S S H事業を組織的に推進し、生徒の幅広い科学的素養を醸成すると共に、新時代を創造するリーダーを育成する。 ④ 生徒の良識を培うと共に、挨拶を含め生徒の社会性を高める。 ⑤ 部活動に積極的に参加し上位大会を目指すと共に、スポーツ・文化芸術等各種大会・コンクールへも積極的に挑戦する。

評価基準 A:十分達成〔100%〕 B:概ね達成〔80%程度〕 C:変化の兆し〔60%程度〕 D:まだ不十分〔40%程度〕 E:目標・方策の見直し〔30%以下〕

年 度 当 初				中 間 評 価（10月）			
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
深く学ぶことの喜びを実感できる授業の研究・実践	○学問の面白さを伝え、自ら学ぼうと挑戦する意欲を育む授業を推進する。 ○主体的に学び合い、切磋琢磨しつつ成長できる機会を増やす。	○授業アンケートで、「授業や行事により教養や関心の幅が広がった」「自ら学ぶ意欲が高まった」とする生徒の割合が約90%となっている。 ○「授業や各種の行事により、教養や関心の幅が広がっている」と回答した生徒は90%、「学習の深まりとともに、自ら学ぶ意欲が高まった」生徒の割合は86%である。 ○総合的な探究の時間などの取組により論文やポスター等に表現する力が養われてきた一方で、課題研究の方法に課題が残っている。	○授業アンケートで、「授業や行事により教養や関心の幅が広がった」「自ら学ぶ意欲が高まった」とする生徒の割合が90%以上を維持している。 ○対話的・探究的な学びによって学問の奥深さに触れる質の高い授業を展開することで、生徒の学問や研究に対する関心、意欲が高まるとともに、多くの生徒がグローバルな視野で物事を考えている。 ○各種研究会・学会や大会等に参加する生徒が250人以上(昨年度約220人)となり、また60人以上(昨年度約60人)の生徒が上位入賞している。	○学習の内容や手法等についての情報共有や教科間の連携を通して、知の世界の豊かさや深さに触れる授業を実践する。 ○SSH及びSGHを通して、課題研究を推進し、生徒の探究学習を深化させる。 ○国内外との交流の機会をより多く提供し、生徒への情報提供と経験を共有できる場を設ける。 ○課題研究メソッドを活用して、研究作法を徹底するとともに、学習評価に関する指標を工夫し、論文やポスターの質的向上を図る。	○各教科で工夫して生徒の意欲を引き出し、互いに教え合いながら学習を進める活動に取り組んでいる。 ○授業中継やGoogle Workspace の利用などの取り組みも増加している。 ○学校設定科目や課題研究で新たな観察・実験など体験的な学びや探究学習に取り組み、論文の内容や体裁に前進が見られた。 ○コロナ禍で様々な活動が制限される中でも海外オンライン研修プログラムや佐治フィールド研修など新たな研修プログラムを開発・実施した。	B	○引き続き教科内だけでなく教科間でも連携を深め、生徒の興味を引きだし、主体的な活動を引き出せるような実践に取り組む。 ○新学習指導要領の内容の研究を通して授業改善を進め、生徒の主体的な学習実践が外部に発信され、評価されるような取り組みを進める。 ○課題研究や生徒の自発的な活動成果を共有させることで他の生徒の積極的な取り組みを引き出す。
確かな学力と高い進路目標に挑戦し、その目標を実現	○高い進路目標に向かう姿勢と態度を育むための取組を充実させる。 ○S S H事業への積極的な取り組みを通して、科学的素養の醸成とリーダーシップの育成を図る。	○年間カリキュラム一覧表を活用した教科横断的学習など、学びの深まる教材の開発や授業実践に向けて取組んでいる。 ○ESDやSDGs等の視点による探究的な学びを通して、リーダーとしてグローバル／ローカルな課題に挑戦する意欲を高めている。 ○大学合格者数において、今春国公立大学212名、難関10大学・医学科 46 名となっている。 ○きめ細やかな面接指導や自宅学習時間調査、各種調査を通して、生徒の学習意欲の向上や進路意識の育成に努めている。	○教科横断的学習など、学びの深まる教材の開発や授業実践が全ての教科で行われている。 ○SSHにおける課題研究や海外交流などの活動への参加を通じて、リーダーとしての資質やコミュニケーション能力が育っている。 ○SDGsと結び付けた図書館活用シラバスを活用するなど、生徒が積極的に図書館を利用している。 ○大学合格者数が国公立大学230名、難関10大学・医学科60名を超えている。 ○面接指導や自宅学習時間調査などを通して、生徒の学習意欲の向上や進路意識の育成を継続している。	○各種研究会の成果や教科を越えた授業公開等を基に、教科横断的な授業の研究を進め、学びの深まる授業を継続的に研究する。 ○各種調査や面接指導の結果を踏まえながら生徒の状況を教員間で共有し、より高い進路目標の維持・達成のためのきめ細かな指導を継続していく。また、学問研究の成果が自らの諸活動へ繋がるよう指導する。 ○総合的な探究の時間及び課題研究等の取組を通して、ESDやSDGs等の視点から多様な社会的課題や科学的関心を高める機会を提示し、生徒の優れた能力を引き出して、知的総合力をもった集団の育成を目指す。	○教科横断的な取り組みについて、その研究や準備を行っており、具体的な授業実践も徐々におこなわれているが、まだ実践途上で生徒の学力向上には反映できていない。 ○きめ細かな面接指導や学問研究の取り組みが行われており、生徒の高い進路意識・進路志望を維持している。 ○総合的な探究の時間やSSHに関する各種研修の実施によって生徒の主体的に取り組む姿勢を引き出している。図書館を積極的に利用した探究活動も活発である。	C	○授業研究会や各種公開授業、授業交流などを通して更に多くの職員がより効果的な学習指導の研究・実践を進めていく。 ○面接指導を継続し、生徒の進路意識を高め、目標が更に明確になるような学問研究の取り組みを進める。 ○探究学習に主体的に取り組んでいる生徒の成果発表等を通して更に多くの生徒の探究活動への意欲・関心を引き出す。
良識を培い、社会性を高めるための指導の推進	○良識を培い、社会性を高める取組を推進する。 ○挨拶ができ、円滑なコミュニケーションを図ることのできる生徒を育成する。	○様々な社会問題の学びにおいて、自らの課題と捉える姿勢が見られるようになったが、課題の多面性や複合性のさらなる理解が望まれる。 ○職員が連携し、生徒の発達段階に応じた適切な支援を行っている。 ○「一人ひとりが規則やきまりを守り、けじめのある生活をしている」と回答する生徒は92%となっているが、校内での挨拶は不十分である。	○SDGs等の学びを通して、自ら自身の社会規範を学ぶだけでなく、社会における文化的な背景や歴史を考慮しながら社会課題を解決しようとしている。 ○礼儀正しく適切な受け答えができ、また自分の意思を自らの言葉で表現できる者が増加している。 ○職員の連携により、生徒の発達段階に応じた適切な支援が継続、充実している。 ○「一人ひとりが規則やきまりを守り、けじめのある生活をしている」と回答する生徒は90%以上を維持し、自ら進んで挨拶ができる生徒が増加している。	○ペアワークやグループワーク等の協調的な活動場面をとおして、コミュニケーションや協働性を高める。 ○様々な社会問題についての学びを通して、課題の多面性や複合性をさらに深める。 ○規則の意味を理解し、挨拶を励行するなど、マナーを身につけた生活ができるよう促す。また、情報モラルを基本的生活習慣とともに身につけさせる。 ○保健室・教育相談の役割を充実させるとともに、面談やhyper-QUアンケートを活用し、生徒理解を深め、個に応じた相談活動を行う。 ○学校運営協議会を導入し、様々な立場で出された意見を学校運営に反映させる。	○生徒は節度と良識をもった学校生活をおこなっており、落ち着いた様子である。気持ちよく挨拶する生徒も増えてきた。一方で自転車マナーについての苦情や事故も散見される。 ○マスクの着用などの感染症防止対策について多くの生徒が意識し実行できている。 ○担任・顧問、学年、保健室、教育相談室の組織的連携により、生徒の心の問題の早期発見や対応が進んできた。	C	○授業や課題研究を通して生徒の社会問題に対する意識を高める取り組みを進める。 ○学校内だけでなく通学途中や学校外でのマナーなどについても更に生徒の意識を高めるような取り組みを継続しておこなう。 ○各職員や組織間の連携を更に進め、生徒の異変に早く気付き迅速に対応できるようにする。
部活動や文化芸術活動等各種大会・コンクールに積極的に挑戦	○あらゆる活動を校内にとどめず、対外的な舞台へ積極的に挑戦する。 ○生徒の活躍に関し、校内外に積極的に情報発信する。	○教科の働きかけにより対外的な発表の場に参加する生徒が増えた。 ○生徒が主体的に生活のあり方を考えられるようにしてきた。運動部文化部ともに多くの部活動が上位大会へ進出している。 ○情報発信は、主に本校の公式ホームページでおこなっているが、アンケートの結果、HPをよく見る、時々見ると答えた保護者は6割前後である。	○情報提供の継続により、生徒が対外的な各種大会等に積極的に参加している。 ○部活動のあり方を踏まえた部活動計画を立てて実施することで、生徒が学習と部活動を両立している。 ○県大会ベスト4以上の運動部活動、中国大会以上の文化部活動が増加している。 ○多くの保護者が、本校では必要な情報が迅速かつ適切に提供されていると思っている。	○研究会等での成果を校内発表会や授業を通して多くの生徒にフィードバックする。 ○対外的な大会、発表会等への参加について、SSH予算を活用するなどして、積極的な参加を支援する。 ○生徒どうしや教員どうしの連携を密にし、個々の生徒に応じた支援を行う。 ○これまでの情報発信を継続すると共により効果的な情報発信方法を検討し、新しいメディアの活用にも取り組む。	○様々な大会の縮小や中止が続く中、オンラインなども活用して生徒は様々な大会や発表会に参加しており、職員も積極的な支援および指導を行っている。 ○各部活動がそれぞれ目標を設定して主体的に活動を行っている。 ○ホームページでの情報発信は従来通りおこなっているが、新しく開設したフェイスブックの利用はまだ低調であり、積極的な情報発信には余地が残る。	C	○引き続き生徒が様々な大会等へチャレンジするよう情報提供や参加への働きかけを行っていく。 ○生徒の活動の成果を対外的に発信するだけでなく、校内の生徒にも積極的に知らせて動機づけを図る。 ○引き続きホームページへの情報発信や報道機関への情報提供を行うとともにフェイスブックなどの活用も進める。
業務改善の取組	○会議や委員会の在り方の見直し ○長時間勤務者の解消	○連日会議等が開催される時期がある。 ○構成員が多すぎる会議や委員会がある。 ○昨年度は、時間外業務時間が45時間/月超の職員は月平均2.4名、360時間/年超の職員数は11名だった。	○委員会の種類、構成員共に適切で、必要な会議が短時間で効率よく行われている。 ○時間外業務時間45時間/月超の職員が5名未満、360時間/年超の職員が10名未満となり、業務改善が進んでいる。	○委員会や構成員を見直す。 ○事前の会議資料を提示することによる時間短縮や、持ち回り会議について検討する。 ○時間外業務が多くなりそうな職員に声をかけ、事情を聞きながら縮減の方策を探る。	○会議の効率化が推進できた。時間外業務時間は月45時間を超える職員が月平均5.3名である。勤務時間外の外部からの電話に自動応答を導入した。 ○PC採点の試験導入や放課後巡回の廃止等業務量削減の取組を進めている。	C	○ノー職員会議月間、ノー会議週間等の導入を検討する。部活動計画表で時間外が多い職員に計画の修正をお願いするなど、時間外業務の縮減に努める。 ○帳票の見直しや電子化など業務の効率化を更に推進する。